

## 主 題：自由人として生きる 2

## 聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 5章13-15節

「自由人とされたあなたは自由人としてしっかりと生きなさい」というのがパウロの教えです。そして、この5章でパウロは、では、その自由人とはどのように生きるのかを具体的に教えています。私たちひとり一人が自らに問い掛けることは、自由をいただいた者として、私はそれにふさわしく生きているかどうかということです。前は、5章1節から自由人として生きることは具体的にどういうことなのかを学びました。それは「神への愛を動機として生きる」(6節) ことでした。神を愛する者として生きなさいということ学びました。6節でパウロは「愛によって働く信仰だけが大事なのです。」と言いました。すばらしい働きをたくさん行うことができても、大切なのはそれらをあなたは愛によって為しているのか？とそのことを問われたのです。信じるすべての人に救いをもたらす信仰は、その人のうちに新しい生き方を生み出します。だから、本当に信仰だと言えるのです。もし、信じたその人のうちに新しい生き方を生み出さなければ、それは本当の信仰ではないと断言できます。

ですから、救いによって生まれ変わった皆さんおひとり一人は、恐らく、次のような願いをもって生きておられるはず。「神に喜ばれる生き方をしていきたい」、また、「神の栄光を現す人生を過ごしたい」と、このような願いをもっているはず。また、「私は神のみことばに従っていきたい」と、このような思いは救いに与ったひとり一人の心にあるはず。そして、そのような思いが新しい歩みをスタートさせました。そうして、あなたは信仰者としての歩みを始めたのです。

ここまでは問題ありません。ところが、そのようなあなたの歩みを見て喜ばない存在があります。間違いなく、それは「サタン」です。なぜなら、あなたがこのような正しい思いをもって神に従い続けていくと、間違いなく、あなたは神の栄光を現します。この世にあってあなたはすばらしい証を為していきます。サタンにとってそれは困ることです。そこで、いろいろな過ちを私たちの中にもたらそうとします。サタンは大変狡猾です。クレバーなもの、悪賢いものです。どんなことをするのか？私たちはすでに見て来ました。思い出してください。

## 「サタンは巧妙に過ちをもたらした」

## (1) 「自分の行いによって神を喜ばせることができる」と信じ込ませる

そのように信じているクリスチャンはたくさんいます。神を喜ばせる、そのような生き方は可能だ、私が努力すればできる。神の栄光を現したい、私が心を入れ替えて神の前に一生懸命頑張ればできると。このような人たちは自分の信仰の歩みを見て、一生懸命歩んでいる自分の姿を見て、自分は神のご好意を得ている、神に喜ばれていると、そのように思い込んでいます。彼らは「〇〇のことをしているから神に喜んでいただいている」、また、「〇〇をしていないから自分は神に喜ばれている」と信じ込んでいるのです。一番悲しいことは、その生き方が間違っているということに気付いていないことです。

少し考えてみてください。あなたは自分の努力によって罪からの救いを得たのでしょうか？一生懸命頑張ったからその結果として神はあなたに救いをプレゼントしてくれたのでしょうか？違いますね。私たちのどんな努力もどんな行いも神の前には不十分です。だから、神のあわれみが必要なのです。そして、神が私たちを救ってくださった。それでいながら、どうして自分の努力で神に喜ばれる人になったとか、また、そのように生きていくことができるのでしょうか？自分で自分を救えなかったものがどうして自分を変えることができるのでしょうか？サタンは巧妙に私たちのうちに働きます。

私たちは好きでしょうか？自分で一生懸命頑張ることが…。だから、あなたの信仰生活の中にもそのように偽りをもたらして「頑張れば…、もう少し頑張れば神に喜ばれる人に変えられる」と、そうして偽りの教えに多くのクリスチャンを巻き込んでいくのです。

## (2) 「誤った動機」で行うことができる

二つ目の問題は、確かに、正しいことを一生懸命行っている、神に喜ばれること、みこころを一生懸命行おうとしている。でも、正しくない動機でそれを行っているのです。サタンは、正しいことを行うことはいいとして、それを正しくない動機で行うようにと働くのです。たとえば、多くの人たちが奉仕や聖書を毎日読むこと、毎日デボーションを持つこと、イエスのことをだれかに伝えること、教会のいろいろな集会にも参加するなど、このようなことをだれかに言われて一生懸命それを守ろうとしている。確かに、これらはどれも良いものですが、いつの間にか、それらが神を喜ばせるというクリスチャンが生きている目的を達成するための手段となってしまっているのです。

つまり、神を喜ばせるためには、これらのことを欠かさず熱心に行っていればそれでいいと信じるよ

うにと働くのです。ですから、クリスチャンたちは一生懸命頑張っているのです。ところが、それはいつの間にか、「したい」と思ってやって来たことが「しなければならない」ことへと変わってってしまうのです。そんなことはありませんか？あなたが救いをいただいたときにあなたは間違いなく喜んで神のみこころに従って行こうと思ってそのように生きて来たはずです。ところが、頑張っているうちにだんだん疲れて来るのです。喜び、感謝がなくなって来ます。でも、止めてしまうことには抵抗があるのでさらに守り続けようとしてます。

ときには考えます。こうして一生懸命やっているけれど神は本当に喜んでくださっているのだろうか？と。そのような疑念を抱いたときに確かに不安にもなります。でも、神に喜んでいただくためにはこれらのことをしなければならないと、聖書的でない信仰によってただ黙々とその行為を継続し続けるのです。そして、自分自身に「神は私をご覧になってきっと喜んでおられる」と自分に信じ込ませて、さらに頑張るのです。

少し想像していただけたと思いますが、このような信仰生活を送っている人はその生活は喜びでしょうか？間違いなく、これは負担だと思いませんか？イエスが来てくださったのは、私たちから重荷を除くためだったのに、このような信仰生活は自分の上にどんどん重荷をかぶせているのです。重荷がどんどん重くなっていると思いませんか？なぜなら、このように生きようと神が教えておられるのではないからです。これは救われた者たち、自由人の生き方ではありません。前回、私たちが見たように、私たちにとって大切なことは、こういうことを一生懸命やれば神が喜んでくださるではなく、神の為にくださったみわざを心から感謝し、その神を愛する思いをもってすべてのことを為すことです。

パウロが私たちに教えたことは、神を愛するという、神への愛があなたのすべての良い行いの原動力でありなさい、それがすべての動機でなければならないということです。思い出してください。あなたが救いに与ったときのことを。あなたがイエスによって救われたことを本当に感謝していたときのことを。イエスが十字架の上で私のために何をしてくださったのか？それを覚えたときにあなたは心から「神さま、ありがとうございます」と感謝されたはず。そして、その後、この感謝をどのように表していけばいいのかと、そのことを考えて神に仕え始められたはず。そのときにあなたが行っていた奉仕は「しなければならない」からしていたのか？それとも「したいから」していたのか？どちらでしたか？思い出してみてください。あなたが救いに与ったとき、間違いなく、私たちは喜んでそれらを「したい」と思ってやって来たはず。です。

それは「愛」です。家庭において母親の役割は大変大きいということは私たちはよく知っています。もし、母親が家族に「私も8時から5時までの勤務にします。5時から好きにします。」となったらどうなりますか？ヘルパーさんならそうでしょう。何時から何時まで、それにふさわしい給料をいただきます。母親はどうか？24時間、家族のために犠牲を払っています。そこまですなくてもいいのに…と思うほど一生懸命喜んでやっています。もし、私たちが彼らに「なぜ、そんなにするのですか？」と問うとどう答えるでしょう？「義務ですから」…と答えるでしょうか？「愛しているから」です。愛しているから喜んでそのような犠牲を払うのです。

かつてはあなたもそのように生きていたはず。神を愛するから喜んで主に仕えていた。「しなければならないから」ではなく「したいから」主に仕えていました。神はそのような心を求めておられるのです。イザヤ書の中で神はこのように言われています。29：13「そこで【主】は仰せられた。「この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれたのことにすぎない。」と。あなたはこのような信仰者ではないですか？形ばかりの信仰者になっていませんか？心をご覧になっている神が喜ばれるのは、神への愛に満たされた心からの行いです。申命記11：13には「もし、私が、きょう、あなたがたに命じる命令に、あなたがたがよく聞き従って、あなたがたの神、【主】を愛し、心を尽くし、精神を尽くして仕えるなら、」と書かれています。

どうすれば私たちはこのような愛を持ち続けることができるのか？皆さん、大きなテーマでしょうか？なぜなら、あのエペソ教会を思い出してください。エペソ書を見るときに私たちが驚かされることは、そこに書かれていることは大変難しい教理ばかりです。ということは、パウロによってエペソ教会は訓練されたのです。教えられたのです。大変な知識がありました。ところが、黙示録に書かれているように「あなたは初めの愛から離れてしまった。」(2：4)。そういうことは起こり得るのです。どんなに知識を持っていても神に対する愛を失ってしまう、その愛が冷え切ってしまうことがあるのです。私たちが考えなければいけないことは、そのような信仰者に自分になっていないかどうか？です。そんな教会になっていないかどうか？です。

どうすれば私たちはこの愛を持ち続けることができるのか？残念ながら、今日、そのことを見ることはできません。でも、このガラテヤ人への手紙5章の学びを通して、少なくとも、そのことを見る機会を持ちます。なぜなら、そのことを教えているからです。そこから言えることは「私たち信仰者は神へ

の愛において日々成長することが必要だ」ということです。神への愛が日々成長しているなら、今見て来たような問題は起こりません。残念ながら、私たちの神への愛はだんだん弱っていってしまう、薄くなっていってしまう…。私たちは常に、神はどんなに大きな愛をもって私たちを愛してくださっているのか、そのことを覚えることが必要です。ヨハネの手紙第一 3 : 1 をご覧ください。「**私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです——御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。**」。

今日のテキスト、ガラテヤ書 5 : 13 を見てください。パウロは改めてそのことを教えてくれます。

**☆続けて、自由人としてどのように生きるのか？その生き方を学ぶ**

#### **A. 「自由」は賜物 13 a 節**

自由は神からの賜物であると言います。13 節に「**兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。**」とあります。直訳すると「あなたがたは自由へと召されたのです。兄弟たち。」です。最初のことばは「あなたがた」です。ですから、救いに与っている兄弟たちに対してパウロは大切なメッセージを送るのです。

「**召されたのです**」 : この動詞は受け身です。パウロはこのことばを書簡の中に 33 回使っています。ほとんどの場合、「神の召し」という意味で使っています。「神の召し」とは、罪の中を歩んでいた私を神は名指しで呼んでくださったということです。想像してみてください。この世界の人々の中で、悲しいことに、その現実は多くの人たちは神に背を向けて永遠の地獄へと向かっています。私たちもその一人でした。しかし、その中で神はあなたの名を呼んでくれたのです。あなたの名を個人的に呼んで、あなたをその罪の中からご自分の許へと召してくださったのです。これがこの「召し」ということです。

パウロは別の箇所でもこのように教えています。Ⅱテモテ 1 : 9 「**神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、**」と。はっきりしています。「**聖なる招きをもって**」神は私たちを招いてくださった。それは私たちの働きではありません。あなたがいい人間になったから神が心を変えられたのでもありません。あなたがすばらしい人になったから神は下そうとしていたさばきを思い留まられたのでもありません。すべてこれは神の一方的な恵みであって、「**ご自身の計画と恵みとによる**」のです。

だから、私たちがこの救いに与ったのは 100% 神のご意志に基づくものであって、私たちが何かをしたからではないのです。神は一方的にあなたを救いへと導いてくださり、その上に、あなたを聖め、神の働きへと導いてくださいました。ぜひ、そのことを覚えなければなりません。救いは神があなたを罪から救い出すだけではありません。神のためにあなたを用いてくれるのです。だから、神によって救われた者たちは間違いなく新しい行いを始めて行くのです。新しい行いが生まれて来るのはあなたが生まれ変わったからです。救われたからです。その救いはただ罪の赦しだけでなく、新しい歩みをもたらすものです。

だから、パウロは繰り返して、私たちは救われた者として自由とされた者としてどのように生きて行くのか？信仰者としてどう生きるのか？そのことを教え続けているのです。なぜなら、そのように生きることができる者へと私たちは変わったからです。

#### **B. 自由を用いる 13 b - 15 節**

13 節の後半からは自由をいただいた私たちクリスチャンに、「**その自由を用いなさい**」ということをお教えします。自由を正しく用いて生きていきなさいということです。13 節「**…ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。**」と書かれています。「**機会**」ということばは元々「**出発点、討伐、戦いのための基地、拠点**」という意味でした。そういう基地や拠点を設ける場合は、攻撃に一番有利な場所を選びます。そこから、この「**機会**」ということばは「**口実、言い訳**」という意味を持つことばへとなっていくのです。ですから、ここでパウロは「**自由の正しくない用い方**」を教えてください。

##### **1. 誤った用い方 : 肉の機会として用いる 13 b 節**

「**肉の働く機会としないで、**」「**肉が働くための口実としてはならない**」ということです。「**肉**」とは、肉体という意味もありますが、ここでは「**罪の性質**」として使われています。自分の快楽や欲望を満たしたいとする願望です。自分中心の生き方、自分中心の考え方です。ですから、これは神のみこころに反する生き方です。なぜなら、私たちは本来、神を満足させるために生きているはずなのに、神ではなく自分を満足させることしか考えていないのです。だから、みこころに反するのです。

パウロが教えていることは、あなたは自分の肉を用いて自分が欲する放縦な生き方の口実としてはならないということです。自由とされたのだから、罪を犯してもいいではないか、自分のやりたいことを行ってもいいではないかと、そういった選択をしてはならないということです。確かに、そのような人はいます。描いてみます。過去だけでなく現在も未来の罪もすべて赦されました。罪を犯したくはない

けれど、私は完全ではなく弱い者だから悲しいことに罪を犯してしまう。どうしてもそれを止めることができない。しかも、「こうしてはならない」「こうしなければならぬ」という律法から解放されて自由となったのだから好きに生きればよい、罪を犯しても神の前に赦しを求めたらそれでいい、自分は弱いだから罪を犯しても仕方ないのだと…。ペテロも同様のことを教えています。Ⅱペテロ2：18－19「：18 彼らは、むなしい大言壮語を吐いており、誤った生き方をしている、ようやくそれをのがれようとしている人々を肉欲と好色によって誘惑し、：19 その人たちに自由を約束しながら、自分自身が滅びの奴隷なのです。人はだれかに征服されれば、その征服者の奴隷となったのです。」と。もし、こういう考え方をもっているなら、みことばは「その考えは間違っている、それは自由人である私たちが生きる生き方ではない」と教えます。

皆さん、思い出してください、また、しっかりと覚えてください。私たちクリスチャンの自由というのは「罪に対する自由ではなく罪からの自由」です。かつての私たちを考えると、イエス・キリストの救いに与る前、つまり、自由人となる前は自由がなかったのです。我々は罪の奴隷だったのです。自由とは選択があつての自由です。どちらかを選べる、右に行くか左か？分岐点があるから自由に選べるのです。一本道でどこにも曲がれなかったら全く自由がありません。そこしかないのだから選ぶ必要もありません。かつての私たちはそうだったのです。罪の奴隷として私たちが行うことは罪しかなかったのです。ところが、イエス・キリストを信じることによって自由が与えられました。それはこういうことです。これまでのような罪の生き方をすることもできます。同時に、神が喜ばれる新しい生き方もできます。その選択肢が私たちに与えられた、だから、自由なのです。

#### ・主なる神は自由を与えてくださった

(1) 罪の意識からの自由 : 私たちがイエス・キリストを信じたときに、確かに、イエスは私たちを罪悪感から自由としてくださった。今まで私たちは「自分は本当に醜い、ほんとに汚れている、自分は本当に情けない…」という罪悪感の虜でした。どうすることもできなかった。しかし、主イエス・キリストが備えてくださった救いは完全な救いです。どんなに汚れていても、神は全く聖い者へと洗ってくださった。もう、私たちは自分自身を責めて来たその罪悪感から解放されるのです。もし、そのような責めがあつたときには私たちは言います。「でも、イエス・キリストは私を聖めてくださった。」と。

(2) 罪の罰からの自由 : 主イエス・キリストによって私たちは罪の罰から自由を得ました。永遠の地獄に向かっていた私たちはイエス・キリストを信じることによってその永遠のさばきから救われたのです。イエス・キリストが私に代わってあの十字架でさばきを受けてくださったのです。ゆえに、私はイエス・キリストによって永遠の滅びから永遠のさばきから解放されて自由とされたのです。

(3) 罪の束縛からの自由 : 同時に、私たちは罪の束縛からも解放されました。我々を虜にしていた罪から我々は自由を得たのです。

ですから、私たちに選択肢ができたのです。神に逆らい続けて行くのか？もちろん、クリスチャンならそのような生き方はできませんが、罪を犯すこと、誤った選択をすることもあります。でも、同時に、神に喜ばれる正しい選択をすることもできます。自由となった私たちは「神のみこころに従う自由」を得たのです。ですから、クリスチャンとして、神から自由をいただいた者は、自分の自由を用いて神に従うという選択をします。自分がかつての生き方に引っ張っていかうとする罪に対して私たちは「NO」と言って、神に従う選択をします。

そのような新しい生き方を私たちは為すことができるのです。M. R デハン師は、もう天に凱旋されていますが、この方はアメリカのミシガンで大きなクリスチャンの番組を始められました。この方が書かれたものの中にこのような一文がありました。ある牧師にだれかが質問します。「もし、私が恵みによって救われたなら、私は自分がしたいと思っていることができるのですか？」と、牧師は「そうです、あなたが救われたならあなたがしたいと思っていることをすることができます。しかし、覚えておいてほしいことは、もしあなたが本当に救われたのなら、神はあなたにこれまでとは違う『したい』を与えてくれる。それは『神に仕えたい』という願いである」と。

今までは、自分の肉に従っていきたいという願いをもっていました。これまではそれしか選択肢がなかったのです。でも、新しく生まれた私たち、自由とされた者たちは、今度は、自分の自由の意志をもって、「神に従っていきたい」、「神に仕えていきたい」という選択をします。ですから、私たちが救われたときに気付いたことは、私たちのうちにそういう願いがあることです。「神が喜ばれることをしていききたい」と、これまではそういう思いは全くなかったのに、救いに与った私たちに「神に喜ばれることをしていききたい」と願います。なぜなら、キリスト者は…と、パウロはこのように言っています。ガラテヤ5：24、2：20「5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです」「2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私の

ためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

こうして、私たちに新しい「したい」「こういうことをしていきたい」という思いを神はくださいました。まさに、そのように神は私たちに働いてくださったのです。パークレー師もこう言っています。「キリスト者の自由とは、放縦の生活を送ることではない。なぜなら、キリスト者が自由に罪を犯せるようになったのではなく、神の恵みによって、自発的に罪を犯せない者とされたのである。」と。私たちは自分の意志で選択するのです。自分の意志でこれまで生きて来た罪の生き方に「NO」と言って、その生き方はしないという選択をするのです。それが新しい生き方です。パウロは「そのように自由を正しく用いなさい。もし、あなたがこの自由を自分の肉の働く機会、罪を選択してこれまでと同じような生き方をするのがあってはならない。それは正しい選択ではない。」と言います。

## 2. 正しい使い方 13b-14節

次にパウロは「正しい使い方」を教えます。「…愛をもって互いに仕えなさい。」と。

### 1) 正しい選択

(1) 仕えることを選択 : 「仕えなさい」という動詞は命令形です。パウロが何となくそのように望んだのではなく、これは神からの命令です。しかも、現在形です。皆さんが驚かれるかもしれませんが、この「仕える」ということばが持っている意味です。これは「奴隷としての義務を果たすこと」です。また、別の辞書では「奴隷として仕えることである」と言います。つまり、ここでパウロがクリスチャンたちに対して言っていることは「あなたがたは再び律法の奴隷となるのではなく、他の兄弟姉妹たちの奴隷になりなさい。」ということです。私たちが神の奴隷だということは知っているけれど、なぜ、他のクリスチャンの奴隷になるのか？と、そう思われるかもしれません。でも、理解することは難しくありません。なぜなら、イエスがそのように為さったからです。創造主なる神がこの世に来てくださって、人に仕えるものとなってくださり、そして、十字架を負って私たちの代わりに私たちの罪の罰を受けてくださった。イエスの生涯を見たときに、仕えられるべきお方が仕えるものとなられた。それが私たちに示された模範です。この箇所のみことばで神が命じておられることは「あなたは兄弟姉妹たちの奴隷になりなさい。」です。

(2) 愛することの選択 : しかも、「愛をもって」と書かれています。ここで使われているギリシャ語は「アガペー」、「神の愛」です。だから、「あなたは神の愛をもってあなたの隣人に奴隷として継続して仕えていきなさい。」と言うのです。すごいことを言っていると思いませんか？でも、イエスはそのことを教えて来られたのです。ヨハネ13:34「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と教えられています。神の愛をもって、イエスが示された愛です。ジョン・ストット師はこのように言っています。「我々は愛をもってお互いの奴隷となり、たくさんの奴隷を持った一人の主人になるのではなく、ひとり一人がたくさんの主人を持った一人の卑しい奴隷となるのである。」と。私たちの周りのすべての隣人は私たちの主人である、それが正しく自由を用いる方法であると言うのです。

だから、このように選択するのです。私は新しくされた者として、神が愛しておられる兄弟姉妹たちの奴隷として愛をもって彼らに仕え続けて行く、それを選択する、そのように歩みなさいと教えるのです。

### 2) 律法を成就 14節

まさに、このような生き方は14節「律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるのです。」、律法を成就するものであると言います。こうしてパウロは、この偽りの教師たちが持ち込んで来た、また、実践していた無律法主義、どのように生きてもいい、何をしても構わない、律法など関係ないという教えを完全に否定しています。まさに、あなたが隣人を心から愛すること、神の愛をもって愛することは、律法を成就することになるということです。

ですから、見て来たように、イエスは律法を完全に守られました。そして、私たちも救いに与った者として、神が与えてくださった教えに従って行くのです。5:6で「…愛によって働く信仰だけが大事なのです。」と、あなたがたが行うすべての良いことは神を愛するゆえに行っているのか？神への愛が動機なのかということが問われました。これは「神に対する愛」です。そして、この13節で教えられているのは「隣人に対する愛」です。気付かれたでしょうか？旧約聖書から教えられている律法なのです。これは救いを得るための方法ではない、でも、救われた者は神が教えておられることを守っていこうとするし、それを神が助けてくださって実践できるのです。

こうして、14節で「あなたが愛をもって互いに仕え合うことを実践するなら、あなたは律法を成就したことになる」と教えるのです。パウロはローマ書13:8で「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。」と言っています。私たちが兄弟姉妹を自分と同じように、もっと言うなら、神が愛されたように愛する

ことを神はどれほど望んでおられるかは言うまでもありません。

皆さん、このような生き方が私たちには可能となったのです。救いに与ることによって、自由人とされることによって、このような歩みが可能となったのです。強制されるから、いやいやで、ではありません。自分から進んで私は隣人を愛すると、そういう歩みができるのです。

皆さんもよくご存じだと思いますが、旧約聖書、出エジプト記21章にヘブル人を奴隷として買った場合のことが記されています。21:2-6「2 あなたがヘブル人の奴隷を買う場合、彼は六年間、仕え、七年目には自由の身として無償で去ることができる。3 もし彼が独身で来たのなら、独身で去り、もし彼に妻があれば、その妻は彼とともに去ることができる。4 もし彼の主人が彼に妻を与えて、妻が彼に男の子、または女の子を産んだのなら、この妻とその子どもたちは、その主人のものとなり、彼は独身で去らなければならない。5 しかし、もし、その奴隷が、『私は、私の主人と、私の妻と、私の子どもたちを愛しています。自由の身となって去りたくありません』と、はっきり言うなら、6 その主人は、彼を神のもとに連れて行き、戸または戸口の柱のところに連れて行き、彼の耳をきりで刺し通さなければならない。彼はいつまでも主人に仕えることができる。」、この奴隷が主人を愛するゆえに留まりたいと言ったなら、主人は彼の耳をきりで刺し通します。ピアスです。彼はその主人に仕え続けることができるのです。恐らく、その主人がこの奴隷を見るときに「彼は私を愛している。いやいやではなく強制ではなく自分から進んで私に仕えてくれている。」と思います。また、人がこの奴隷を見たときに、耳にピアスをしているから、彼の主人はずばらしい人なのだろうと思うでしょう。まさに、そういうことを神は可能とてくださったのです。

ウィリアム・パークレーはこのように言っています。「クリスチャンはキリストの霊が宿られていることによって（つまり、聖霊の内住です）、クリスチャン以外には不可能なこととされている「自分を愛するように隣人を愛する」までに自己を聖められている人である。」と。自分と同じように人を愛することはできません。でも、聖霊なる神がいてくださる私たちは、その神の助けによってそれが可能なのです。そうですね、皆さん！だから、クリスチャン生活というのはすごい祝福なのです。人間的には不可能なことを神はしてくださるのです。神は私たちを益々変えてくださる。皆さんに質問です。「どんな人に我々は変えられていきますか？」⇒「主イエスに似た者」です。この地上にあつて私たちをそんな人へと変えていってくれるのです。

### 3. 正しく用いないことへの警告 15節

ここには、今見て来たように、愛をもって互いに仕えるという選択をしなかった人、自由を正しく用いなかった人々に対する警告が書かれています。15節「もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。気をつけなさい。」と。ここには二つの動詞があります。「かむ」と「食う」です。現在形でこれは比喩的に野生動物の姿を表しています。野生動物は相手のことなど考えません。ライオンがウサギを捕まえるとき、その家族がとか子どもが何人かなどとは考えません。自分のことしか考えていません。まさに、そのような野生の動物が争っているその様子を敢えてパウロはここで描いているのです。なぜ、こんなことを書いたのでしょうか？まさに、それがこれらの教会の姿だったからです。まさに、これはこの教会の様子を現していたのです。教会の中には、神の真理にしっかり立ち続けている者たちがいました。その者たちは愛をもって互いに仕え合っていたのです。

今見て来たように、その正しいクリスチャンたち、神が喜ばれるクリスチャンたちは自分のためではないのです。周りの兄弟姉妹たちの信仰の成長のために尽くしていたのです。彼らは自分のことなどどうでも良かったのです。彼らが見ていたのは、周りにいる愛する兄弟姉妹たちのことです。そのような生き方を確かにみことばは私たちに教えます。なぜなら、私たちの一番大きな問題は、私たちの問題を自分に向けることです。自分が受けるにふさわしい扱いを受けていないなら、我々は苛立つのです。「私をだれだと思っているか？」と、そして、皆が自分に仕えることを期待します。

でも、みことばはそれとは違います。全く逆のことを教えます。「仕えなさい、あなたが率先して」と。兄弟姉妹たちの奴隷として、もちろん、愛をもって彼らに仕えていきなさい、イエスが歩まれたようにあなたも生きていきなさいと言います。ですから、ここにいるグループの人たちは、まさに、このみことばを実践している者たちでした。間違いなく、その人たちは周りの人たちのことを気にかけて彼らのことを愛して、彼らの成長のために何ができるかを考えて、もちろん、彼らのことを祈りながら一生懸命に仕えている者たちです。神が大いに喜ばれるそんな信仰者たちが教会の中にいたのです。

でも、教会の中にはそうでない者たちもいました。この人たちは律法を重んじていて、自分の行いを重んじていて、行いによって神のご好意を得ようとしていた者たちでした。ですから、彼らは自分たちの行いを自慢し、同じことをやっていない人たちをさばっているのです。隣人のことよりも常に自分が中心になっていないといけない。すべての中心に自分を置いているのです。そして、この人たちは愛ではなくて常に不満があり怒りがあります。兄弟のことを悪く言ってみたりします。残念ながら、そのような人たちが教会の中に存在しているというのは、新約の時代にも記されています。

神の恵みによって建てられた教会の中にこのような問題が存在しているということは、聖書から何度も教えられています。このガラテヤのいくつかの教会も同じだったのです。一つになっていなかった。霊的な一致がなかったのです。みことばに従って生きている人たちと、自分の思い通りに生きている、そんなクリスチャンたちが混在していたわけです。神の前を正しく歩んでいる人たちは間違いなく喜びを持って生きているでしょう。そうでない人たちは常に不満を持っている。さばき合って、そして、赦し合うことのない、そのような人たちが教会の中にいたのです。

でも、そういう人たちも変えられます。聖霊によってその人たちが変えられていくことは可能です。でも、そのためには自分の誤ちに気付いて、神の前にその罪を悔い改めなければ何の働きも起こって来ません。パウロが教えるこの教えにこの命令にしっかり心を留めてください。救いに与ったあなたに神が何を期待しておられるのか？それはあなたが隣人の奴隷となって愛をもって仕えることです。それが自由を得た者としての生き方だと、そのように教えているのです。

さて、それを聞いたあなたがたにはその選択ができました。それに従うのか、逆らうのかです。それにあなたが失敗しながらでも従っていこうとするなら、神はあなたを祝してあなたを用いてくださる。そういう人たちが集まっている集まりは間違いなく神が喜んでくださる。ですから、神に喜ばれる人になるかどうかは、あなたの責任だということです。だれかのせいにはできないのです。そして、神が喜ばれる教会になるかどうかは、一人ひとりに係っているのです。一人くらい好きに生きている者がいても構わないと、もし、そういう思いを持っているのなら悔い改めなければいけません。あなたも私も、この地上での生活をどう生きるかという責任があります。

15節を見てください。もし、このようなことをしているのなら「お互いの間で滅ぼされてしまいます。」と書かれています。これは「焼き尽くす、滅ぼす」ということばです。いったい、何が滅ぼされるのか、何が焼き尽くされると言っているのか？教会自体が滅ぼされてしまう、焼き尽くされてしまうと言っているのでしょうか？ここで言われているのは、建物のことではなく証のことです。教会の中に分裂があるなら、どうして神に喜ばれるでしょう？神のみことばに従おうとする人たちとそうでない人たちがいて、なぜ、神は祝されますか？どのようにしてその教会が神の栄光を現すことができますか？

私たちが覚えなければいけないことは、サタンが望んでいることは教会の中に分裂や分派を作り出すということです。大切なことは、一人ひとりの責任としてみことばに従うことです。個人としても教会としてもその責任があります。サタンはそれを崩そうとするのです。聖書ではなくあなた自身の考えに従うようにと。そして、そのような教会になってしまったら、そういう人たちになってしまったら、個人としても教会としても証を失うのです。だから、このみことばが教えているように、「愛をもって互いに仕え合うこと」、それを実践することです。愛をもって、奴隷として、隣人の霊的成長のために尽くすことです。

ペテロはIペテロ2：16で「あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。」と同じことを言っています。アメリカにアイアンサイドという有名な牧師がいました。もう今は天に凱旋されていますが、このように言っています。「かつては神のために輝いていた多くの証が、今日台無しになっている理由をあなたは知っているか。それは神の人々の間から出てくる、口論好き(異論・文句)の人、人のあら捜しをする人、つぶやきの人がその原因なのである。」と。このような人が教会から証を奪っていってしまうと。少なくとも、そんな人にならないように注意を払うことです。我々はどう生きるのか、救いに与った自由人である我々がどう生きるのか、みことばが教えてくれています。神を愛しなさい、心から。そして、すべてを心から神のために行いなさい。あなたの為すことすべてがこの神への愛が動機となるように、そして、隣人を愛しなさい。彼らにあなたは奴隷として仕えていきなさい、愛をもって。これが自由人として生きなさいと教えている神のことばが示してくださる生き方です。どのように生きるのか？ここに書かれてありました。神の助けをいただきながらその実践に励むことです。その責任は私たち一人ひとりにあります。神の助けを仰ぎ見ながら、このように歩いていきましょう。

#### 《考えましょう》

1. 「召される」とはどういう意味かを説明してください。
2. 「愛をもって互いに仕え合いなさい」を説明してください。また、この命令の実践が厳しいのはどうしてだと思われませんか？
3. 「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という教えを実践するためにはどうすれば良いと思われませんか？
4. どうして「かみ合ったり」、「食い合ったり」しているなら「滅ぼされる」のでしょうか？その意味を説明してください。